# 米国に於ける人種問題：Part III：両人種集団の狭間で

日　吉　和　子

1994年6月に前妻のニコール・シンプソンとその友人でレストランのボーイのロナルド・ゴールドマンが惨殺死体で発見され，その後その殺人の容疑を問われ警察当局に身柄を拘束されるまさにその日に全米中にテレビの生中継でその『逃走劇』が報じられ，以来米国民の注目と関心を引き付けている元フットボールのスーパースター選手のO・J・シンプソン事件は殺人容疑は別としてその焦点が当初の夫による妻に対する暴力行為，つまり“battered wife”問題から「人種問題」へと移っていると言う内容の記事が8月1日付けの雑誌「タイム」に掲載された(1)。

その記事のタイトルは“Coloring the O. J. Case”である。“color”と言う言葉が使用されている点が非常に興味を引く。まず単純に考えればその言葉は何かに「着色する」と言う意味であるが，「事実を歪める」とか「物事を粉飾する」などネガティブなニュアンスを持つことからこの記事の筆者が意図しようがしまいがこの事件が単純な殺人事件審理とはならないし，その展開に対して筆者が否定的な意見を持っていると言う印象を与える。そして次にどんな色合いが施されるのかの問題に関してはその“color”と言う言葉が同時に伝えているのである。まず米国に於いてかつて人種差別待遇が公然と行われていた時代には“colored”と言う言葉はアフリカ系アメリカ人を意味していたし，また“color line”もしくは“color bar”と言う言葉は主として白人と黒人との間を隔てている差別障壁の事で現在でもその両人種が絡んだ問題の中でしばしば使用されている言葉であると言う事実がある。それゆえに日常生活の中で頻繁に人種的要素に晒される機会を持ち，それに関して敏感に反応する習慣を長い歴史の中で身に着けて来た白人主流社会と黒人社会に住む人々にとっては特にその記事のタイトルを見ただけで「O・J・シンプソン事件」は白人対黒人と言う構図の人種問題の色合いを呈する方向に進んでいるのだと即座に分かると言う効果を持つのである。それは同時にまだ記憶に新しい1992年のロス暴動とその引き金となったロドニー・キング殴打事件の裁判を連想させ，今回は黒人が被害者ではなく殺人容疑者であるので事件の性質が違うことは歴然としているがシンプソンの弁護団が黒人に対して人種差別的に行動する警察（今回の事件を担当しているのはロドニー・キング事件と同様にロサンゼルス市警で当時ロス警察及び警察官の人種的偏見の「実態」が裁判の過程で中心的話題となりロス市警に対するその様なイメージが人々の，特に黒人の人々の心の中にはっきりとまだ残っている可能性が

あるし，全米中で警官の黒人に対する処遇の仕方に人種偏見が見られがちであると黒人社会は主張し続けている現実もある）の観点から弁護を展開して行くと，最悪の場合には主流社会に対して不満を日頃から抱いている一部の黒人達にキング殴打事件と同じような心理的効果を与え，裁判の結果次第では同じような暴動事件もおこりかねないし，より穏やかな反応でも黒人社会全体からの強い反発と不信感が示されることになる可能性があると警鐘を鳴らす意味もその“color”という言葉の中に含まれていると考えるとその言葉がいかに意味深いかが分かるであろう。

ところでこの言葉はこの事件の中心人物のO・J・シンプソンのこれまでの人生を語る上において欠くことのできない重要な必須用語であると言えるかもしれない。6月27日付けの「ニューズウィーク」誌にシンプソンが1992年にあるインタビューの中で言った言葉が引用されている。彼がこの事件で身柄を拘束されるまで契約していたテレビ・コマーシャルの広告主のあるレンタカー会社が実施した全ての調査の結果，彼が“colorless”(2)な存在であるとその会社から言われたと言う内容である。この場合，そのコマーシャルが彼自身の特定の人種集団だけにアピール効果を持つと言うよりは人種的要素に関係なく広く受け入れられていた事，つまり主流社会を形成する白人達からも支持を得ていて，彼の姿をコマーシャルで見ても彼が黒人である事が「念頭に浮かばない」(3)程になっていた事を意味している。現に「ニューズウィーク」誌の別の記事によれば，シンプソンは「温和な物腰で，白人に脅威を与えない黒人の男らしい資質についての鑑の様な人物として，そして主流社会の中に受け入れられたアフリカ系アメリカ人で白人達を安心させるような模範例として広く考えられていた」(4)そうである。これは彼の人種集団，特にその男性達に付き纏う否定的固定観念から彼自身を解き放つのに彼が成功しただけでなく，彼のその“colorless”なイメージは世間一般の人々の間にも広く植え付けられていた事の証明となるだろう。その記事はさらに続けて「彼はある記者に向かって彼が『成し遂げた中で最大の事』は人々に『私を一人の黒人男性の様にではなく先ず第一に一人の男性の様に受入れ』させたことであると言った」(5)と伝え，彼の人生の主要な関心事と達成目標の一つが何であるかがいみじくもその発言の中で明らかにされている。まさにそれは人種を超越する事，“colorless”な存在になる事，『一人の男性』になる事であった。つまり「彼は自分自身をアフリカ系アメリカ人だと見ていなかった。彼は只自分自身をO・J・シンプソンとして見ていただけであった」(6)と言う評価こそまさに彼が受けたいと望んだ評価であったに違いない。シンプソンの“colorless”な社会的地位の状況と達成度は今回の事件発生直後の各種のマスコミ報道により，そして一部には人種に関係なく発生する夫による妻に対する暴力行為問題が最初に浮上してきた事実によってもかなりはっきりと示されたと言えるかもしれない。

ところでアフリカ系アメリカ人である彼が“colorless”になる為に選んだ手段は彼に関する幾つかの報道記事を総合すると注意深く自己を鍛錬し主流社会の白人にできるだけ近付くという方法であった事が判明する。これは19世紀末ブッカー・T・ワシントンが黒人の社会的地位向上

の為の主要手段として提唱していた方法と根本的には大差は無いが，1960年代の公民権闘争の成功の後差別撤廃措置計画などを通して社会進出の道がより開け，中産階級化する黒人達がより多く見られるようになっている現在ではそこには一つ大きな相違があると考えられる。つまり現在では社会的地位に関してワン・ランク上，もしくはそれ以上を目指す手段にそれが使われている点である。ワン・ランク上の中産階級化するにつれ都会のスラム地域から郊外へと引っ越し白人中産階級と同じ様な生活様式と意識を持つ傾向が見られるという現象の中にその例を見て取れると思う。白人中産階級が依然として米国に於ける中産階級の既存の手本，それも多数派の手本であるのは否定できない現状を考えるとその現象傾向の説明として主流社会の中で成功したら期せずしてその様な生活様式と意識を持っていたに過ぎないとする解釈は不自然に感じられる。むしろアフリカ系アメリカ人だけでなく他の少数民族集団の人々も同様に中産階級の生活を目指して日々努力している過程でその多数派の手本が彼等の働く意欲を刺激する目標となり意識的にそこに近付こうとした結果その様な現象傾向を一様に示すことになったと解釈した方が妥当であろう。そして生活が主流社会の白人の生活により近付くとはある意味では成功のインディケーターとして昔も今も受け止められている事に変わりはなく，シンプソンもその中産階級への道を辿って行ったに過ぎないと言えるであろう。

ところでシンプソンは彼の人種集団に付き纏う否定的イメージの典型的とも言える環境で育ったと言えるだろう。なぜならばサンフランシスコと言う大都市の貧困地域で，「刑務所へ行く道は近くて一直線に通じている様に見え」[7]る程犯罪が日常茶飯事の場所が彼の居住環境であり，彼が５才の時に父親が家を出ていってしまった母親だけの貧困家庭と言う家庭環境であったからである。「金を持たないスラム地域の子供達にとって金が何よりも重要である」[8]事を直接肌で実感した彼が子供時代に野球のスーパースター選手で黒人のウィリー・メイズが彼にとって英雄だと思えたのは彼が同じ市の裕福な居住地域に「大きな家」[9]を持っていたからであると述べている。その彼が15才の時にそのウィリー・メイズに会って話しをする機会が与えられ黒人でも成功し英雄になれるのだと知り，自分も「成功するのだとさらにずっと心に堅く決心した」[10]段階ではその物質的成功とファンからサインを求められる有名人になる事[11]が目的で，即座に“colorless”になろうと努力し始めたとは思えない。大学のフットボール・チームで活躍し1968年に年間最優秀選手に与えられるハイズマン・トロフィー賞を獲得しプロに転向しテレビコマーシャルに出演する頃から，つまりスポーツの世界で頂点に立つと言う成功の第一階段を順調に上りつつ，スポーツ世界の先に通じる第二の階段に足を掛け始めた頃，彼はその努力の必要性を本格的に実感したのかもしれない。有名なニクソンとケネディーのテレビ討論で大統領戦の行く末が左右されたと言われる程視覚的に不気味なほど大きなインパクトを与えるマス・メディアの怪物であるテレビを通して世間一般の人々，つまり主流社会の人々の目に晒される事になった時，米国社会の中で黒人として生きてきたシンプソンは抵抗無く万民に受け入れられるには，つまり

この世界で成功するには彼の人種的要素を前面に出すよりも“colorless”な印象を与える方が効果的であると悟るのに専門家の助言は必要無かったであろう。その結果その頃からシンプソンは“colorless”になる努力を意識的に，かつ積極的に実践し始めたとしても少しも不思議ではない。彼がかつてテレビ・コマーシャルの撮影中サンフランシスコでの子供時代にその地域の巷で使われていたスラングを彼がたまたま口に出してしまった時彼は「自分自身に酷く腹を立ててその撮影を止めて」[12] 撮り直しをし，その時彼は「私の子供達と余り多くの時間を一緒に過ごし過ぎると起こる事なんだ。つまり私は白人の様に話すやり方を忘れてしまう」[13] と弁明したと言われているエピソードからもその当時の彼の努力の程がうかがえる。そして彼のその努力は知名度が増すにつれ次第にエスカレートする方向を辿り，彼は「自分を白人だと考えていた」[14] と言う発言が聞かれる事からも最終的には究極の白人化を目指す，つまり肌の色以外はまったくの白人になろうとする，いわゆる“bleaching syndrome”といわれる症状を示すレベルにまで至っていたらしいと考えられるのである。前に引用した「彼は自分自身をアフリカ系アメリカ人として見ていなかった。彼は只自分自身をO・J・シンプソンとして見ていただけである」と評した発言の主はその直前に“He wasn't trying to pass as a white person and he didn't espouse being a black person.”[15] と述べている。この中で“pass”と言う言葉は昔から黒人社会の中で使われていた用語で黒人の血統ではあるが白人との混血などを通して外見上は白人として通用する人が黒人であることを隠して白人社会の中で白人として生活する事を意味している。シンプソンの場合彼が黒人である事は既に世間一般に知れ渡っていたし，彼の外見も写真を見れば分かる様に白人として通用しそうにもないので当然彼は「白人として通そうとはしなかった」のではなくて「できなかった」のである。しかも彼は黒人でありたいとは思わなかったとなると最終的には黒人色をできる限り感じさせない“colorless”なO・J・シンプソンのイメージを可能な限り白人に近付けようとする道しか残されていなかったと思われる。

ここで問題となるのはこれはサンフランシスコで暮らしていた子供時代に彼が持っていた黒人的な物全てを漂白してまったく違った人間に彼が「変わったと言うよりもむしろほんの時たま剝がれることがあった表面を磨き上げる為に塗り重ねられた層またはメッキの層を彼が付け加えた」[16] に過ぎないと言う点であった。話し方から行動形態，身なりから妻に至るまで黒人色を消し去ったとしてもエスニック・アイデンティティーと言う彼の存在の根本的要素は皮膚の色同様に漂白しようがないのである。結局，白人主流社会の中で“colorless”であると言うのは白人と黒人のどちらの世界にも帰属できない宙ぶらりんの存在を意味することになる。かつて「タイム」誌のある記事が主流社会の中で典型的な白人中産階級とまったく同じ様な生活をしている黒人中産階級が彼等の社会的地位に相応しい扱いを周囲の白人達から受けない為その社会の中にぴったりと入り込んでいる気がしない一方で彼等が去った後に都会の貧困地域に残された貧しい黒人社会，特にその中でも最下層の黒人達に対して同情はするが彼等とは距離を置いて考えており

彼等とは別の集団意識を感じ始めている事から同胞社会にももはやぴったり嵌まり込めないでいる問題点を報じその状態を称して "Between Two Worlds"[17] と形容した。7月11日付けの「ニューズウィーク」誌のシンプソンに関する記事も "Caught Between Two Worlds"[18] と言うタイトルを用いている点からも判断できるようにこの宙ぶらりん状態は黒人の社会進出が活発化すると共に一層表面化してきている問題でシンプソン本人がどの様に感じているかは定かではないが少なくともマスコミ報道はシンプソンも例外ではなくこの殺人事件発生によりその点が表面化して来ていると解釈する方向に傾きがちである。

この宙ぶらりん状態の原因は主として黒人と言う人種集団に属する人が米国主流社会の中で活躍しているとしても，その人物の人種全体に関する偏見的要素を彼等の脳裏から消し去る事がなかなかできない白人社会の側にあると考えられる。シンプソンが述べている様に周囲の白人から初めは『一人の男性』として扱われるとしても初対面の白人が相手の場合にはどうだったのだろうか？　同じ様に『一人の男性』として処遇されていたとしたらこれはテレビやマスコミを通じてまさに顔と名前が広く知られている著名人であった事に起因すると言えるであろう。「ワシントン・ポスト」紙に引用されているシンプソンがかつて語った言葉がその良い証拠になるであろう。テレビ・コマーシャル，特にレンタカー会社のコマーシャルにより彼が「14年間フットボールをしてきた後で全国的に認められ知られるようになったよりももっと一年で」[19] 彼が誰であるかを知られるようになったと彼は述べている。それにもかかわらず有名なO・J・シンプソンだと瞬時に識別できない人には視覚的見地からまず彼が「黒人男性」の一人に見えてしまい，「黒人男性」として処遇する点は避けられないであろう。結局もし彼がそう望んだとしても現在の米国の人種状況を考えると彼は白人主流社会の「正式な」一員としては最後まで受け入れられないであろう。その結果白人社会の中での精神的な宙ぶらりん状態が生み出されるのである。しかし「オー・ジェイ」と言っただけでO・J・シンプソンだと分かる程彼がこのまま社会の中で活躍し続けたなら彼のこの様な生活は脅威を受けなかったであろうが，今回の様な殺人事件に巻き込まれその容疑者とされた場合には実際，既にその傾向が見られるのであるがこの宙ぶらりん状態に揺さぶりがかけられ黒人社会に揺さぶり戻されてしまうのである。そして結局は彼は「あの有名なO・J・シンプソン」ではあるがそれまでの "colorless" なO・J・シンプソンではなく「黒人」のO・J・シンプソンとして論じられてしまう事になるのである。

一方黒人社会の中に見られる自分自身の育った環境や人種社会から離れて行くことが米国社会の中での自分自身の成功を意味する状況もまた「宙ぶらりん状態」を生み出すもう一つの原因と考えられる。シンプソンは「タイム」誌の記事によればそれまで「黒人社会にとても結び付けて考えられない」[20] 存在であり，彼等の「人種内部では本来の黒人としての活動をしなかった」[21]「白人と一緒に走っている金持ちの気取り屋」[22] であった。7月11日付けの「ニューズウィーク」誌の中でその記事の筆者は「この頃ではシンプソンが黒人集団に属している状態を最小限に

しようとした努力は広くあざけりを伴い軽視されている」[23]として，シンプソンは『白人に迎合する黒人』[24]と言う酷評まで引用している。事件発生時にシンプソンと彼の人種集団との間には黒人社会から離れて白人に囲まれて生活していた点に対する反感をも含みかなりの感情的，意識的距離が存在していた事は明らかである。しかしそれは必ずしも彼だけに向けられた極端な意見であると言うわけでもない。現に都会の黒人貧困層の問題解決に関して報じる「ニューズウィーク」誌のある記事の中にニューヨーク市ブルックリンの都市再開発地域となったフォート・グリーン地域で通り一つを隔ててビジネス地域の繁栄と貧困が隣り合わせになっている状態が報じられその繁栄地域に属する黒人中産階級に関して「彼等は彼等自身の［公立］学校を，彼等自身の教会を持っている。彼等はまるで外国人のようだ」[25]と評する発言が載せられている。黒人中産階級も黒人の貧困層に対して距離を置いているし，彼等に対して後者の間に反感が存在しているのは明らかである。両者の間にある物理的心理的距離は先程述べた社会進出を取り巻く状況から必然的に生じて来る結果であり，黒人中産階級の人々がどの位距離を置こうとするかにより個々の「宙ぶらりん状態」の程度が決まってくると考えられる。シンプソンの場合は極限まで離れようとしていたのでその「宙ぶらりん状態」もそれに比例して最大限のレベルであったと推測される。しかしその事件をきっかけに完全に距離を置いていたと思えていた黒人社会からは本当はそれ程離れていなかったと彼と黒人社会の双方が知らされる事になったのである。それは彼の人生にとっては特にそれまでの努力を否定されたに等しい悲劇的出来事と言えるであろうが，主流社会の白人達が個々の黒人の業績や地位よりもこの人種集団に対する否定的固定観念で全ての黒人達を眺めがちな傾向がいまだに続いている事を考慮すればその距離感などその様に簡単に白人社会によって否定され，黒人社会の中に押し戻されてしまうのは当然予期できることでもあった。そしてその「宙ぶらりん状態」の根底には黒人人種集団の社会的経済的地位と彼等に対する否定的固定観念があると言えるであろう。

白人社会のその距離感の否定，黒人社会の中への押し戻し行為は厄介な事には別の問題を黒人社会の中に引き起こしているのである。それは「社会の中で目立つ黒人が間違ったことをすると黒人人種集団全体がその代償を払わされる」[26]と黒人人種社会が感じることである。特に黒人男性に対する否定的固定観念が歴然と存在している社会の中で中産階級やそれ以上の社会的地位にいる人が事件を起こすと地位や身分に関係なくその否定的固定観念は人種全体に当てはまると言う印象を強めてしまう傾向にあり，その様な事件が起きると「多くの黒人にとっては全ての黒人男性が裁判にかけられている」[27]かの様に感じさせられる事になると言うのである。それは個々の黒人達と白人社会との関係を通して形成された意見であるがそれは結果的には白人社会に対する一種の集団防衛反応を引き起こす体質も作り出している。つまり一端その様な事件が起きてマスコミなどの報道を通してその渦中の人物に対する批判や非難がその人物をまさにその否定的固定観念の中に押し込もうとする時様々な程度ではあるが同種の経験を持つ個々の黒人達にとって

はその人物が直面している問題は他人事には思えなくなり，その人物を白人社会の犠牲者として弁護しようとする動きを見せるのである。それにより黒人社会に冷たい“colorless”なO・J・シンプソンは彼等一人一人が自分の姿を投影する黒人のO・J・シンプソンになるのである。「O・J・シンプソンは黒人男性である彼が犯罪者であるからではなく，黒人男性である彼が男性であるという事と彼の皮膚の色が理由でますます犯罪者だと見なされるので彼等の代わりに裁判にかけられている代理人の様になっている」[28]と感じる現象がマスコミ報道が加熱するにつれ黒人社会の中に起こってくるのである。6月28日に発表された「ロサンゼルス・タイムズ」紙の世論調査によると解答した黒人の内74％がシンプソンに対して「非常に同情する」か「幾分同情する」と答えている一方で「シンプソンに同情する」と答えた白人は48％で41％は同情していないと答えている[29]。その結果を単純に考えれば予備審問が始まる前に既にシンプソンへの自分の姿の投影と集団防衛反応が黒人社会の中で進行中であった事が分かる。マスコミ報道によりこれまでの“colorless”であると考えていた彼のイメージを過去のものにされ，白人が黒人に対して抱く否定的固定観念を超越したと思っていたのは幻影であったと公言されたにも等しい状態で黒人社会の中に押し戻されてしまったシンプソンが頼ることができるのは彼の弁護団とこの黒人社会の集団防衛反応だけかもしれない。その反応により人種問題の観点からの解釈が唱えられ事件の成り行きに影響を与えることになるのは必定である。

ところでこの集団防衛反応を黒人社会の中に引き起こすもう一つの要因がある。それは前にも述べた警察を含む法執行官への不信感をさらに補強する米国刑法制度への根強い不信感である。それでもし裁判で有罪になった場合は極刑，カリフォルニア州の場合死刑になる可能性もある第一級殺人の罪状で告訴されるかどうかの段階になると事件それ自体が人種問題の方向に向かう様相を呈してくるのはこの事件が発生した時から十分予期できた事であった。なぜならば彼が実際に殺人を犯したかどうかの問題は米国の司法当局にまかせるとして二人の白人の殺人被害者と黒人の容疑者と言う要素は白人主流社会が黒人達に対して抱く否定的固定観念に合致するだけでなく，この様な場合黒人容疑者が有罪になり死刑にされる確率は黒人が被害者で白人が容疑者の場合よりも高いのは人種差別であると主張してきた黒人社会の不信感と不安を高めるのに十分であったからである。冒頭で述べた「タイム」誌の記事の中でもその点が指摘されている。「多くの黒人達は無罪だと証明されるまで彼等は有罪であると考えられていると感じている」[30]のである。本来容疑者は有罪だとされるまでは無罪として扱うのが原則の米国司法制度の中で黒人が不当に扱われていると黒人社会が常日頃から考えているのである。「タイム」とCNNの共同世論調査によるとシンプソンが公平な裁判を受けると信じていると答えたのは白人の63％に対して黒人は31％だけであり，公平な予備審問を受けたと考えている人は白人の66％に対して黒人は31％[31]に過ぎなかった。そしてその記事の筆者はその世論調査の結果は「多分シンプソンに不利な証拠について黒人達がどの様に見なしているかと言うよりも黒人達が一般的に米国の刑法制度によっ

て処遇されているやり方をどの様に評価しているかを表しているのだろう」[32] と述べている。

この司法制度に対する黒人社会の不信感は9月13日にクリントン大統預により署名され正式に成立した犯罪対策法が連邦議会で審議されている過程でも出現した。それは死刑囚が統計数値を用いてその死刑判決が "racially biased"[33]，つまり「人種的に偏っている」としてその判決が無効であると主張することを許す条項をその法案の中に入れるかどうかであった。5月11日付けの「ワシントン・ポスト」紙は連邦議会がその条項をその法案の中に入れるかどうかの審議（結局その日，上院では58対41でその条項を入れると言うその前の月に下院で承認された提議を否決した）を巡る討論は感情的でありそれに賛成反対の両陣営が自分達の主張に都合の良い統計数値を使っているとしながらもそれに賛成する側が提示する次の統計数値を挙げている。会計検査院が1990年の報告書に「死刑判決：調査は人種上の不均衡の傾向を示す」[34] と言う題名を付け黒人を殺した人と白人を殺した人とを比較すると後者の方がより死刑判決を下される事がありそうであると結論付けているが「被告人の人種が死刑判決に影響を与えているかについてはそれ程はっきりとしてはいない」[35] としているとその記事は伝えている。次にその記事は全米黒人向上協会が1976年以来死刑執行がなされた事件の311名の殺人犠牲者の84％が白人であったとしているが司法省のデーターによると全米中で殺人事件の犠牲者のおおよそ半分が黒人である事が分かるとして唯一の黒人の上院議員のキャロル・モズレイ＝ブラウンの「アフリカ系アメリカ人の犠牲者の生命は我々の司法制度の中では少数民族集団ではない集団（つまり白人集団）の犠牲者の生命程高く評価されてはいないように思える」[36] という発言を載せている。さらに「その条項を法案に入れることに賛成する者達の中には黒人達は米国の人口のたった12％しかいないけれども1976年以来処刑された236名の死刑囚と現在死刑囚監房にいる2,800人のおおよそ40％を占めていると言うデーターを引き合いに出している」[37] としている。その記事によるとそこには地域差があると言う意見があり南部と西部地域において人種偏見的傾向が見られるとして公民権専門の弁護士達の指摘する統計数値を引用している。その内の一つ，フロリダ州のベイ郡では殺人犠牲者の40％が黒人であるが「1975年から1987年までの全ての極刑となった事件には白人の犠牲者が巻き込まれていた」[38] そうである。8月1日付けの「タイム」紙の記事の中でも「1977年以来白人を殺害したかどで63名の黒人が処刑され，一方黒人を殺害したかどではたった一人の白人だけが処刑されたに過ぎないのはなぜか」[39] と黒人達が抱いている不信感を報じている。

一方その条項を法案に入れる事に反対する人々の側では政党派閥の駆け引きがあるとしても，ニューヨーク州選出の共和党のアルフォンス・M・ダマト上院議員の「『殺人を犯したことが本当であると認められた殺人者』が『残念だけど，人数割り当て枠が一杯だ』と告げられて処刑を免れることについて騒ぎ立てた」[40] と伝えている。これは貧しい都会のスラム地域に住む黒人達と犯罪の増加を結び付けて考えがちな白人達が潜在的に「そんな事が起きたら困る」と思っている点を少々誇張しているかも知れないが代表して言っているに過ぎないとも解釈できる発言であ

る。犯罪発生率や犯罪者の割合は各人種集団により様々であるので米国人口に占める黒人人口を引き合いに出すのは少々無理があると思われても当然である。あるマイノリティー集団が地域社会に占める人口比を反映させる就職や公営住宅などに対する人数割り当て制度とは根本的に異なる性格のものであるのは明らかである。とにかく人口10万人あたりの投獄者の割合は黒人が1980年には1,111人で1992年には2,678人に急増しており，白人の場合は168人から372人[41]と増加してはいるが黒人と比較すると７分の１弱の割合である事を考えると理解できる反応だと言えるだろう。しかしそれでも黒人の側からすれば極刑になる黒人の数と白人を殺害した時の方が極刑になりやすいと言う統計数値が与える米国司法制度への不公平感は拭い切れないであろう。

この米国司法制度に対する不信感の存在は上記に述べられている様に明白な事実である。それで殺人の決定的証拠となるだけでなく，「ワシントン・ポスト」紙の記事によれば予謀の殺意を持った計画的殺人を証明するとして第一級殺人で容疑者を有罪にする際に重要な証拠[42]ともなる殺人現場に残されていた血にぬれた左手の革手袋に非常に良く似ている同じく血染めの右手だけの手袋がシンプソンの家で警察により発見されたがそれは捜査令状なしに行われた捜索中の発見であった言う事実とそれを発見したのが黒人警官ではなかったと言う事実が明らかになった段階で人種問題を巻き込む材料が揃ったとシンプソンの弁護団は判断したのではないかとこれはあくまでも推測の域を出ないがそう考えたのではないかと思われる。そこには典型的な人種的論争を巻き起こす要因，つまり人種差別的警察と彼等による「違法」家宅捜査と白人警察官対殺人容疑をかけられた黒人という二種類の材料が揃っていた。それは警察や刑法制度などに不信を抱く黒人社会に強い集団防衛反応を引き起こさせる，少なくとも黒人社会の世論をシンプソンに味方する方向に持って行くには十分すぎる材料であった。それで彼の弁護団はそれまですべて白人で構成されていたが８月１日付けの「タイム」紙の記事によると有名な黒人の法廷弁護士のジョニー・L・コクランが新たに加わりその弁護団自体の“「人種統合を幾分し」[43]たそうである。それまでの弁護団は“colorless”なシンプソンには相応しかったが黒人社会にはそれは白人を好み白人に取り巻かれているシンプソンのイメージそのままを現していたので多少反発を感じさせていたかもしれない。この新たな動きはシンプソンの“colorless”なイメージを取り外し黒人社会にアプローチする姿勢を公言したに等しい行動である。それは黒人社会全体を巻き込み人種問題の方向に事件の焦点を向けようとするにはプラスに働くことは確かであろう。シンプソンの弁護団はあくまでも「人種問題はこの弁護の論争点ではないし，将来もそうならないだろう」[44]とは言っているが彼等の動きはその発言とは裏腹にもう既にそれを論争点にしようとしている様相を呈している。実際８月31日付けの「インターナショナル・ヘラルド・トリビューン」紙の記事の題名は“Racism Charge Heats Up Simpson Case”である。つまり人種差別主義が存在すると言う告発がシンプソン事件を過熱していると言う内容である。その記事によるとコクラン弁護士が最初の捜査にあたった４人の警察官の内の一人で問題の手袋を発見した人物は「アフリカ系

アメリカ人に対して，より具体的にはっきりと言えば白人と結婚しているアフリカ系アメリカ人に対して敵意を心に抱いている」[45] と言い，またその人物は「過去においてある黒人容疑者注意人物を銃で撃ち，彼を罪に陥れることになるであろう証拠を発見されるように置こうとしたと断言した」[46] そうである。またその警察官が「白人と黒人と言う異人種同士の夫婦を困らせるために彼は合法的な口実を『でっち上げる』だろうと言ったとして告発した」[47] ある女性の証言からの引用もしたそうである。この発言は自らもアフリカ系アメリカ人である弁護士によるものであるので直接彼と同胞の社会に訴える影響力は強いと考えられる。そしてその目的は明らかに黒人社会の警察に対する不信感を一層強化する事であるのは否定できないだろう。この事によりシンプソンはこれが弁護戦術の一部であるとしても彼の弁護団からも彼は黒人であるとはっきりと宣言され黒人社会に送り戻されてしまった事になる。

この黒人社会の中に存在する白人社会に対する不信感を究極に高めた物と考えられるのがこの論文の第一部の中でも既に述べた「白人陰謀説」である。8月1日付けの「タイム」誌の記事の中でもシンプソンの“colorless”な生活に反発を感じていた黒人達の多くが「シンプソンを白人権力機構のもう一人の犠牲者」[48] と見なし始めており，「さらにもう一人の黒人社会を代表する顔とも言うべき有名人を引きずり落とす事でアフリカ系アメリカ人を困惑させる『白人メディアの陰謀』だと言う噂話がある」[49] と伝えている。「エボニー」誌のこの事件に関する質問状に答えた著名な黒人達の答えの中にもその陰謀説がはっきりと語られているものがある。例えば，その中の一人でイリノイ大学の精神医学の教授のカール・ベルはメディアは「黒人男性に対して組織的に否定的な宣伝活動を続けている」[50] としてマス・メディアが報じる黒人男性のイメージを信じるならば彼等にできる事は「犯罪，怠惰，スポーツと音楽だけである」[51] と言うことになってしまうと述べている。作家のイシュマエル・リードは「何千人もの黒人市民がほとんどの場合，犯罪で告発されてすらいないのにメディアによって罪を問われている。メディアは人種差別をなくそうとする努力に関して南部よりも50年遅れているのでこれらの黒人達は新しいすべて白人の陪審団，つまりジャーナリストやマス・メディア評論家，トーク番組の男性司会者や心理学者　やテレビ・コラムニストや種々雑多ながやがやしゃべる食わせ者達により有罪を宣告されている」[52] と少々過激に思える発言すらしている。ハーバード大学の医学部の教授で精神医学の臨床医であるアルヴィン・P・ポーセイントはシンプソン事件は「成功した黒人男性を一晩で黒人の否定的固定観念の型にはまった典型的な凶暴な黒人の男に変身させることで彼を破滅させようと法執行官とメディアが協力しているさらにもう一つの例だったのだろうか？　私はシンプソンを罪に陥れようとするロサンゼルスの司法当局者達からのニュース漏洩に勇気づけられたメディアが『アメリカ人全ての英雄』の転落を喜んでいるように見えるのに苛立ちを覚えた」[53] と答えている。これらの発言はまさにメディア報道により袋叩きの目に遭っているのはシンプソンであるが黒人男性全体も同じ憂き目に遭っているに等しいと感じている事を示している。そしてこの

事件が黒人男性に対する否定的固定観念を増強する為の手段に利用されていると感じているのは明らかである。この「白人陰謀説」は結局主流社会の中で活躍している黒人の脳裏からも消し去る事ができないほど根深いことが分かる。

そしてこの「白人陰謀説」に対する黒人社会の最近の反応を知る上において役に立つと思われる例が第一部の中でも引用したマリオン・バリーの近況である。彼は首都ワシントンの市長であった1990年にFBIの囮捜査でクラックを吸引している現場をビデオに撮られ麻薬不法所持で逮捕され市長の座を迫われ自ら服役までした人物である。その事件の際にも「白人陰謀説」が彼自身の口からも唱えられていたが9月15日付けの読売新聞によるとその彼が「麻薬事件そのものが，黒人政治家に対する白人権力の罠」(54) と主張して既に1992年には市会議員に当選しており，さらに今年の市長戦の民主党予備戦に立候補して何と勝利し，民主党が圧倒的に多いその市に於いては民主党予備戦勝利により彼は事実上市長に当選したのと同じであると言う。彼が麻薬不法所持で逮捕された時彼の政治生命は逮捕と共に終わったと一般的には受け止められていたし，ある政治解説者は「もしバリーがこの出来事から元通りに立ち直ることができたら彼は本当に政界における偉大な魔術師フーディーニーの様な人だ」(55) と評していたにもかかわらず彼は見事に復活を成し遂げたのである。人口の70％(56) が黒人で，白人と黒人の住む地域がはっきりと分かれており，「アフリカ系アメリカ人も社会的階層によりはっきりと区分がされている」市の中での予備戦に際してバリー候補は「アフリカン・コスチュームに身を包み」(57) 黒人色を全面に打ち出した。彼は90年の事件により黒人世界に事実上押し戻されていたと考えられるがさらに1992年には出所後彼がそれまで住んでいた中産階級地域から「アナコスチア川の東側の前ほど上品ではない地域」(58)に引っ越し，服装や教会や友人達も黒人社会に密接した人々を選び，3番目の妻すらとも離婚して黒人社会の中で長い間彼等の為に活動してきた女性と結婚していた。それで彼は民主党の予備戦に於いて彼の対立候補となった2人の黒人と比較しても「最も黒人集団に属する」(59) 候補者になっていたと9月26日付けの「ニューズウィーク」誌は述べている。バリー候補は政治的白人陰謀説を黒人社会の信仰心と結び付け，彼が勝利することが彼の贖罪と救済につながり問題を抱えたその市の教済につながるとしたそうである。「『神の力により私は復活した』と得意の弁舌をふるい」(60)，「自分の履歴書に彼の犯した罪を記入し」(61)，罪を犯した彼だからこそその市の『最後の，最も価値の無い，そして道に迷っている人々』(62)，つまり貧困，犯罪，麻薬，殺人事件，失業，未婚の母などの問題が渦巻く地域社会の中に嵌まり込み身動きが取れないでいる人々を救うことができるのであり，彼等を救うことが神から与えられた「彼の使命」(63) であると言う方向の選挙戦を行い，「同市の貧困層や若者に強くアピール」(64)したと伝えられている。とにかく政治，貧困，宗教，人種，そして黒人社会の中で綿々と受け継がれて行く白人社会への不信感と「白人陰謀説」が合体したその選挙戦でバリー候補は黒人社会を代表して彼等の為に白人社会やマスコミと戦う人になり，一人一人に彼との一体感を抱かせる事に成功したとも言えるで

あろう。それで「マスコミや白人がバリー氏を非難し，その復活を恐れれば恐れるほど黒人大衆の間のバリー人気が上昇するという政治構図」[65]，つまり白人社会に対する集団防衛反応が生み出される状況の中で黒人社会の彼に対する支援や支持が強まり，団結力を増し，彼の犯罪歴は選挙戦でのマイナス要因とはならなくなったと考えられる。結局彼のその奇跡とも思える復活を可能にしたのは一端何かを契機に刺激されるといつでも表面に噴出して来る黒人達の心の奥底に絶えずある白人社会に対する根深い不信感と不満であった。それは政治世界の常識を打ち破り前科のある者を市長候補にさせるほどのエネルギーを持っていると今回の出来事は証明したとも言える。今回の出来事はまた白人社会と黒人貧困層との間の感情的溝は少しも埋まってはいないどころか深くなっている様相を呈している点もはっきりさせた。それで「バリー氏の勝利は米社会の人種分裂を象徴する“事件”」[66] と解釈されるのも当然かもしれない。

同時に表面上そこには前にも述べたように人種内分裂も存在していた。今回の市長予備戦の場合白人集団が支援したのは別の黒人立候補者であり，しかも黒人中産階級も一緒にその候補の支持に回っていた。その点で他の地域でも見られる様に白人の価値観を身に着けた黒人中産階級と黒人貧困層とのはっきりとした人種内分裂が鮮明に浮き彫りにされたと言えるであろう。この黒人中産階級の存在は「白人陰謀説」に傾きがちな従来の黒人社会の物の考え方に歯止めをかけ，被害者意識を改善し両人種がより友好的な関係を持てるようになる将来を暗示していると考えられていた。前述の８月１日付けの「タイム」誌はシンプソン事件の焦点が人種問題の方向を示し始めた事に対して一部の黒人達がその事件は「白人との平等の権利を獲得する闘いを着実に押し進める為の手段としては最適な手段ではないと気をもんでいる」[67] として「実際には人種差別主義がまったく無いのに人々が人種差別主義を叫ぶならば彼等は『狼だ！』と叫んだ少年の様になる。結局それは元に戻ってきてあなたに付きまとい悩ますのである」[68] と言うロサンゼルスの放送局の黒人解説者の言葉でその記事を締め括っているがこのコメントこそ黒人中産階級から出たものであり，黒人中産階級の黒人社会に占める割合が増加すればこの様な考え方もそれに比例して広まって行くかもしれないと期待させる内容である。しかし人種に関する物事はそれ程単純ではなかった。９月26日付けの「ニューズウィーク」誌の記事は黒人中産階級が必ずしも一枚岩ではなかったと告げているのである。その記事は彼等は表面上は反バリー派ではあったがバリー候補が黒人票の50％近くを得た事実は一部の中産階級の人々が彼に投票した証拠であり，投票場で心変わりしてバリー支持に回った事が判明すると報じている。もはや支持する政治家に関しては「十分な教育を受けた黒人とリベラルな白人」[69] とは意見を一致させることができないとその記事の筆者は述べている。これは黒人が圧倒的多数の首都ワシントンと言う特殊事情を反映しているので必ずしも全米中で同じ現象が見られると言う訳ではないであろうが黒人中産階級の成長にかける人種関係改善の期待に陰りを与える出来事であるのは確かである。さらにそれに陰りを与えるのが前に引用した「エボニー」誌に掲載された黒人中産階級の人々も「白人陰謀説」を信じ

ているらしい発言と今回のシンプソン事件でも実証された様に黒人中産階級の人々も不利な事件に巻き込まれたら，本人の意思であろうが，周囲の者達の戦術であろうが，人種問題を利用して何とかして難局を切り抜けよう，または少なくとも不利な要素を少なくさせようとする道を選ぶと言う態度である。しかも黒人の知的階層の中には多元文化論を説き，主として学問や教育現場で白人中心社会の視点に疑問を投げ掛け，極端なアフロ・セントリックな考え方を主張し白人社会との溝を深め「アメリカの分裂」[70] を招きかねない動きすら一部に見られるのである。彼等は黒人社会の人種意識を高め，黒人であることに誇りを持たせたいと言う目的から出発していた。いまだに全国平均よりも低い平均所得や高い学校の中退者の割合とか犯罪率とかに悩む黒人社会が抱える問題点を白人社会が黒人人種集団に植え付けてきた人種的劣等感と関係があるとして心理的な面から解決していけるのではないかと彼等は考えた。そもそもその発想自体が「白人陰謀説」と結び付いていると考えられる。そして歴史上実証されている事実を歪曲してしまう程極端な見解を述べる人達の出現は白人と黒人の双方の人種集団の関係改善にはマイナスに作用すると思われる。結局この知的階層の人々を含むこの種の考えを持つ黒人中産階級の人々は子供時代に自ら貧しい黒人世界を体験し，そこに流布されている「白人陰謀説」を耳にする機会を持ち，主流社会の中に入る過程や入った後で実際にその存在を感じた経験すら持っているかもしれない中産階級のファースト・ジェネレーションの人々であると考えると彼等が「白人陰謀説」を唱えるのも理解できる。その場合彼等の子供や孫達の世代，つまり黒人中産階級のセカンド・ジェネレーションやサード・ジェネレーションには「白人陰謀説」を薄めてくれる期待を寄せることができるかもしれない。

一方都会のスラム地域の最下層の黒人貧困者は前回の論文でも論じた様に貧困のサイクルの中からなかなか抜けられそうにも無い現状で彼等はどっぷりと黒人社会とその諸問題に漬かりそこから白人主流社会を眺め，「白人陰謀説」を持続させるに十分な不満を培養してゆく可能性が多大にありそうである。また今回のシンプソン事件でも示された様に白人社会も人種問題の観点を完全に否定できないばかりか，その観点からの事件説明を受け入れる傾向が存在する事実は黒人社会と白人社会との間には対等な人間関係が依然として確立してはいない，または人種を越えた付き合いにまだ慣れていない，またはそれを受け入れるのに抵抗を感じている証拠となるであろう。「インターナショナル・ヘラルド・トリビューン」紙は "'O. J. 'Trial: A Candid Look at Ourselves" と言う題名の記事に "Trial: The Simpson Case Holds a Mirror to Society"[71] と言うサブタイトルを付け，"シンプソン事件が，人種関係に関して米国社会を如実に写し出しているとして，白人と黒人の異人種間の関係，特に婚姻関係，をタブーとする習慣がいまだにあり，「ある一部の人々にとっては人種の垣根の向こう側の芝生はこちら側よりも青いだけでなくそれは禁断の実でもある」[72] と述べているがその言葉こそ白人と黒人が対等な関係には無いことを物語っている。米国社会の中に白人の世界と黒人の世界が存在しその両世界の間に経済的社会的心

理的格差が存在する限り，この種の“coloring”が残念ながら繰り返されることになるであろう。

（注）

（1） 参照：“Coloring the O. J. Case,” *Time,* New York, The Time Inc. Magazine Company, August 1, 1994, pp.34～35.

（2） 引用：“He Could Run...,” *Newsweek,* New York, Newsweek Inc., June 27, 1994, p.12.

（3） 引用：“Day & Night,” *Newsweek,* New York, Newsweek Inc., August 29, 1994, p.37.（筆者による翻訳）

（4） 引用：“Caught Between Two Worlds,” *Newsweek,* New York, Newsweek Inc., July 11, 1994, p.29.（筆者による翻訳）

（5） 引用：同上。（筆者による翻訳）

（6） 引用：“Day & Night,” p.37.（筆者による翻訳）

（7） 引用：“End of The Run,” *Time,* New York, The Time Inc. Magazine Company, June 27, 1994, p.40.（筆者による翻訳）

（8） 引用：同上。（筆者による翻訳）

（9） 引用：同上。（筆者による翻訳）

(10) 引用：“Handcuffs Don't Fit the Image,” *The Washington Post,* Washington, D. C., The Washington Post Inc., Wednesday, June 15, 1994, A10, c 3～4.（筆者による翻訳）

(11) 引用：“Day & Night,” p.37.（筆者による翻訳）

(12) 引用：“End of The Run,” p.40.（筆者による翻訳）参照：“Day & Night,” p.37.

(13) 引用：同上。（筆者による翻訳）

(14) 引用：“Caught Between Two Worlds,” p.29.（筆者による翻訳）

(15) 引用：“Day & Night,” p.37.（筆者による翻訳）

(16) 引用：“End of The Run,” p.40.（筆者による翻訳）

(17) 引用：“Between Two Worlds,” *Time,* New York, The Time Inc. Magazine Company, March 13, 1989, p.32.

(18) 引用：“Caught Between Two Worlds,” p.29

(19) 引用：“Handcuffs Don't Fit the Image,” c 3.（筆者による翻訳）

(20) 引用：“Coloring the O. J. Case,” p.35.（筆者による翻訳）

(21) 引用：同上。（筆者による翻訳）

(22) 引用：同上，p.36.（筆者による翻訳）

(23) 引用：“Caught Between Two Worlds,” p.29.（筆者による翻訳）

(24) 引用：同上。（筆者による翻訳）

(25) 引用：“A Tale of Two Cities,” *Newsweek,* New York, Newsweek Inc., August 15, 1994, p.13.（筆者による翻訳）

(26) 引用：“Caught Between Two Worlds,” p.29.（筆者による翻訳）

(27) 引用：“Coloring the O. J. Case,” p.35.（筆者による翻訳）

(28) 引用：同上。（筆者による翻訳）

(29) 統計数値参照：“Attorneys Spar Over Evidence,” *The Washington Post,* Washington, D. C., The Washington Post Inc., Wednesday, June 29, 1994, A3, c 1.（筆者による翻訳）

(30)　引用："Coloring the O. J. Case," p.35.（筆者による翻訳）
(31)　統計数値参照：同上。（筆者による翻訳）
(32)　引用：同上。（筆者による翻訳）
(33)　引用："Congress Revisits Bias Issue in Capital Cases," *The Washington Post,* Washington, D. C., The Washington Post Inc. Wednesday, May 11,1994. A4,c1.
(34)　引用：同上，c 3.（筆者による翻訳）
(35)　引用：同上。（筆者による翻訳）
(36)　引用：同上，c 3〜4.（筆者による翻訳）
(37)　引用：同上，c 4.（筆者による翻訳）
(38)　引用：同上。（筆者による翻訳）
(39)　引用："Coloring the O. J. Case," p.35.（筆者による翻訳）
(40)　引用："Congress Revisits Bias Issue in Capital Cases," c 2.（筆者による翻訳）
(41)　統計数値参照："Population Explosion In Prisons," *The Washington Post,* Washington, D. C., The Washington Post Inc., Thursday, June 2, 1994, A 3.（筆者による翻訳）
(42)　参照："Glove Disclosed in Simpson Case," *The Washington Post,* Washington, D. C., The Washington Post Inc., Friday, July 1,1994, A 20. c 2〜3.
(43)　引用："Coloring the O. J. Case," p.34.（筆者による翻訳）
(44)　引用：同上。（筆者による翻訳）
(45)　引用："Racism Charges Heats Up Simpson Case," *International Herald Tribune,* International Herald Tribune Inc., Wednesday, August 31, 1994, p.3.（筆者による翻訳）
(46)　引用：同上。（筆者による翻訳）
(47)　引用：同上。（筆者による翻訳）
(48)　引用："Coloring the O. J. Case," p.36.（筆者による翻訳）
(49)　引用：同上。（筆者による翻訳）
(50)　引用："The O. J. Simpson Case," *Ebony,* A Johnson Publication, New York, September, 1994, p. 140.（筆者による翻訳）
(51)　引用：同上。（筆者による翻訳）
(52)　引用：同上，p.32.（筆者による翻訳）
(53)　引用：同上，p.30.（筆者による翻訳）
(54)　引用：「バリー氏復活確実」，読売新聞，東京，読売新聞社，1994年 9 月15日（木曜日）4 ページ。
(55)　引用："You Set Me Up," *Time,* New York, The Time Inc. Magazine Company, January 29, 1990, p.32.（筆者による翻訳）
(56)　引用："Marion Barry's Revival Act," *Newsweek,* New York, Newsweek Inc., September 26, 1994, p.40.（筆者による翻訳）
(57)　引用：「バリー氏復活確実」
(58)　引用："Marion Barry's Revival Act."（筆者による翻訳）
(59)　引用：同上。（筆者による翻訳）
(60)　引用：「バリー氏復活確実」
(61)　引用："Marion Barry's Revival Act."（筆者による翻訳）
(62)　引用：同上。（筆者による翻訳）

(63) 引用：同上。(筆者による翻訳)
(64) 引用：「バリー氏復活確実」
(65) 引用：同上。
(66) 引用：同上。
(67) 引用："Coloring the O. J. Case," p.36. (筆者による翻訳)
(68) 引用：同上。(筆者による翻訳)
(69) 引用："Marion Barry's Revival Act." p. 40. (筆者による翻訳)
(70) 参照：「アメリカの分裂」，アーサー・シュレージンガー，Jr. 著，都留重人　監訳，岩波書店，東京，1992年。
(71) 引用："'O. J. 'Trial: A Candid Look at Ourselves," *The International Herald Tribune,* The New York Times and The Washington Post, Tokyo, Tuesday, September 27, 1994, p. 1 and p. 3.
(72) 引用：同上，p. 3. (筆者による翻訳)

**(参考文献)**

*Newsweek*, New York, Newsweek Inc.
"Mayor Barry: Lurid Tales of the Tape," July 9, 1990, p. 37
"He Could Run...," June 27, 1994, pp. 8～18.
"Get Someone Over Here Now,'" July 4, 1994, pp.18～20.
"Caught Between Two Worlds," July 11, 1994, p. 29.
"Capitol Punishment," July 25, 1994, p. 26.
"A Tale of Two Cities," August 15, 1994, p.13.
"Day & Night," August 29, 1994, pp. 32～41.
"Marion Barry's Revival Act," September 26, 1994, pp. 40～41.
*Time*, New York, The Time Inc. Magazine Company
"Between Two Worlds," March 13, 1989, pp. 32～38.
"You Set Me Up," January 29, 1990, p. 32.
"End of The Run," June 27, 1994, pp.36～43.
"Playing to the Crowd," July 4, 1994, P.40.
"Flesh and Blood," July 11, 1994, pp.32～33.
"The Burden of Evidence," July 18, 1994, pp. 34～36.
"Coloring the O.J. Case," August 1, 1994, pp. 34～36.
*The Washington Post*, Washington D. C., The Washington Post Co.
"Congress Revisits Bias Issue in Capital Cases," Wednesday, May 11, 1994, A 4.
"Population Explosion In Prisons," Thursday, June 2, 1994, A3.
"O. J. Simpson In Seclusion After Ex-Wife's Death," Wednesday, June 15, 1994, A1 & A10.
"Handcuffs Don't Fit the Image," Wednesday, June 15, 1994, A10.
"Review of Records Shows Simpson Abused Wife," Thursday,June 16, 1994, A3.
"Simpson's Ex－Wife Pleads For Help on Police Tapes," Thursday, June 23, 1994, A1 & A16.

"Simpson Lawyers Press for Access to Evidence," Thursday, June 23, 1994, A17.

"Attorneys Spar Over Evidence," Wednesday, June 29, 1994, A3.

"Glove Disclosed in Simpson Case," Friday, July 1, 1994, A1 & A20.

"Witnesses Tell How Nicole Simpson's Dog Led Them to Her Body," Saturday, July 2, 1994, A3.

"For Families of the Victims, It Hurts to be in Courtroom," Saturday, July 2, 1994, A2.

"Prosecutor Builds Chronology To Undermine Simpson Alibi," Wednesday, July 6, 1994, A16.

*International Herald Tribune,* Tokyo, The New York Times and The Washington Post

"Racism Charges Heats Up Simpson Case,", Wednesday, August 31, 1994, p.3.

"'O. J.' Trial：A Candid Look at Ourselves," Tuesday, September 27, 1994, p. 1 and p. 3.

*Ebony,* New York, A Johnson Publication, September, 1994.

読売新聞，東京，読売新聞社，「バリー氏復活確実」，1994年９月15日（木曜日）４ページ。

アーサー・シュレージンガー，Jr. 「アメリカの分裂」，都留重人監訳，岩波書店，1992年